

令和7年度（第74回）「神奈川文化賞」及び 「神奈川文化賞未来賞」の受賞者プロフィール

神奈川文化賞

えはら ゆみこ

江原 由美子 (73歳)

●学術●

日本のフェミニズム分野の第
一人者



1979年東京都立大学着任以来、複数の大学で社会学教員として勤務し、女性学・ジェンダー研究の草創期を担う。『女性解放という思想』（1985年）、『生活世界の社会学』（同）、『フェミニズムと権力作用』（2000年）、『ジェンダー秩序』（2001年）（いずれも勁草書房）、『自己決定権とジェンダー』（岩波書店、2002年）など多数の著書を刊行。自らが編者となった『フェミニズム論争—70年代から90年代へ』（勁草書房、1990年）以降、『フェミニズムの主張』と題して論争的なテーマの論文集を続々と手掛け、若手のジェンダー研究者に大きな影響を与えてきた。

また、女性問題を日本社会全体の問題であることを訴えるため、1994～95年刊行の『日本のフェミニズム』全8巻、2009～11年の『新編 日本のフェミニズム』全12巻（いずれも岩波書店）にも携わった。フェミニズム理論に大きな功績を残し、大学での講義を通じて後進の育成にも寄与してきた。

加えて、現在顧問を務める一般社団法人神奈川人権センターでは、同センターが刊行した『21世紀の人権』（日本評論社）を監修し、県民に人権問題の基本と歴史を学んでもらう機会の提供に貢献するなど、教育や社会活動など様々な場面で積み上げられた実績が評価されている。

[横浜市在住]

神奈川県文化賞

さかい ただやす

酒井 忠康 (84歳)

●文化活動●

近代美術の研究と評論に尽力



1964年、大学時代の恩師の紹介により、神奈川県立近代美術館の土方定一館長と出会い、学芸スタッフとして仕事を始める。以来、60年以上にわたって、日本近代から現代にいたる美術の研究と評論活動を行う。1992年から2004年まで同美術館館長を務め、展覧会の開催等を通して、国内外に文化的な刺激をもたらす。海外の美術関係者と積極的に交流し、国際的な人間関係を構築することにも貢献してきた。

彫刻の分野においては、初の公立美術館での個展をした若林奮を担当し、その調査研究からイザム・ノグチやダニ・カラヴァンなどの世界的な彫刻家たちの研究へと展開する。他方、幕末明治の美術の研究に情熱を注ぎ、その成果を1979年に『開化の浮世絵師 小林清親』（せりか書房）、『海の鎖』（小沢書店）として上梓。芸術・文学分野で第一回サントリー学芸賞を受賞した。

公私を問わず長年にわたり多くの美術・文学・歴史と幅広い関係者との交流を重ねて文化の発展に寄与してきただけでなく、2001年6月から2022年3月まで美術館連絡協議会の理事長として、神奈川県を含む全国の美術館の連携と学芸員の育成にも貢献した。

[逗子市在住]

神奈川文化賞

えりかわ よういち

襟川 陽一 (75歳)

●産業●

日本のゲーム業界黎明期を築き、
その発展に貢献



1978年、株式会社光栄（現株式会社コーエーテクモゲームス）を設立。1983年に、現在も続く大ヒット作である歴史シミュレーションゲーム「信長の野望」を発売し、神奈川県横浜市にある同社を世界的なゲームメーカーに押し上げた。

一方で、ゲームクリエイター「シブサワ・コウ」としても知られており、経済にとどまらず文化の創造者としても長年第一線で活躍している。

また、2023年3月に、学資金給付のため設立された襟川教育財団（2024年7月より公益財団法人）では選考委員長として、シングルマザー（母子）家庭にあって、経済的理由により、高校、大学、大学院への就学、受験が困難な学生への支援を行うなど、次世代を担う子どもたちの希望につながる取組にも尽力している。

2027年7月、世界初の「ゲームアートミュージアム」を横浜みなとみらい地区に開業予定。ゲームを単なる娯楽としてではなく、「アート」として捉えるというコンセプトのもとに構想され、ゲームファンだけでなく、美術やデザイン、技術に関心を持つ幅広い来館者に対して、ゲームが持つ芸術的・文化的な価値を新たな視点で伝える「世界に誇るゲームの聖地」として期待されている。

[非公表]

神奈川文化賞

のざわ まさこ

野沢 雅子 (89歳)

●芸能●

声優業の草創期から現在まで第一線で活躍



劇団に所属していた10代後半から、洋画の吹替をきっかけとして声優としての活動を始める。当時、成人女性が少年の声をあてることは海外にはあまり例がなく、声優文化における豊かな表現の可能性を拓いた。

1969年に日本で初めて設立した声優専門の芸能事務所（青二プロダクション）の立ち上げメンバーであり、今では日本のみならず、世界中の子どもたちの憧れとなっている声優という職業を確立したパイオニアの一人。

1986年から放送された鳥山明氏原作の世界的大人気アニメ「ドラゴンボール」シリーズでは、主人公「孫悟空」役のみならず、二人の息子に加えて父親役も演じ分け、視聴者に衝撃を与えた。

長きにわたる活動の成果は、2017年に二つのギネス世界記録「ひとつのビデオゲームのキャラクターを最も長い期間演じた声優」「ビデオゲームの声優として活動した最も長い期間」（いずれも演じた声優期間は23年218日）として認定されている。

東京の下町で生まれ育って、横浜の街に引っ越してきて40年以上。性別や年齢の枠を超え演じ分ける高度な技術で、89歳となる今もなお世界中のファンを魅了し続けている。

[横浜市在住]

神奈川県文化賞未来賞

つじどう

辻堂 ゆめ (32歳)

●文学●

小説家として活躍



幼少期から読書が好きで、小説家になることを夢見ていた。2015年、東京大学在学中に第13回『このミステリーがすごい!』大賞優秀賞を受賞し『いなくなった私へ』（宝島社）で小説家デビュー。出身地である藤沢市辻堂にちなんで付けたペンネームとともに、ミステリーの構造に人間ドラマを織り交ぜた作風で絶えず読者を魅了し、2025年にデビュー10周年を迎えた。

『トリカゴ』で第24回大藪春彦賞受賞および第75回日本推理作家協会賞候補、『十の輪をくぐる』で第42回吉川英治文学新人賞候補。2022年『卒業タイムリミット』がNHK総合で連続ドラマ化された。2024年に刊行された、自身の体験を投影させた小説『二人目の私が夜歩く』のインタビューでは、「文字を追っている感覚を忘れられる作品を書き続けたい」との思いを語っている。

そして2025年8月、デビュー10周年記念作品となる『今日未明^{きょうみめい}』を発表。新聞の片隅にしか載らない、小さな5つの事件の裏にある、報道されない真実を描いた慟哭の犯罪ドラマとして大きな話題となった。神奈川県が生んだ本格ミステリー作家として、これからも読者に驚きと、その先にある感動を与え続けていく。

[神奈川県在住]

神奈川文化賞未来賞
よしだ えりか
吉田 恵里香 (37歳)

●芸能●
脚本家・小説家として活躍



神奈川県出身。大学では資料室や図書館に毎日のように通い、「1年で365冊本を読む」ノルマを自分に課していた。在学中に演劇制作の手伝いをしたことがきっかけで脚本家の道に進み、映画「ヒロイン失格」、ドラマ「30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい」などのほか、アニメ、舞台、ラジオドラマなど多くの作品を手掛けるようになる。

2022年のNHKよるドラ「恋せぬふたり」で第40回向田邦子賞、ギャラクシー賞受賞。アロマンティック・アセクシュアル（恋愛指向の一つで他者に恋愛感情を抱かないこと。アセクシュアルとは、性的指向の一つで他者に性的に惹かれないこと。どちらの面でも他者に惹かれない人を、アロマンティック・アセクシュアルと呼ぶ）の人々をテーマに脚本を執筆し、高く評価された。

また、2024年度前期NHK連続テレビ小説「虎に翼」の脚本を執筆。日本初の女性弁護士、判事、裁判所長を務めた県内ゆかりの法曹家・三淵嘉子氏を題材にオリジナルストーリーを制作し、第62回ギャラクシー賞テレビ部門大賞、第33回橋田賞、第51回放送文化基金賞ドラマ部門最優秀賞などを受賞した。

[非公表]